

十九世紀末から二十世紀初頭における 報復のミイラ・フィクション

金 崎 茂 樹[†]

The “Revenging Mummies” in late Victorian and Edwardian Literature

KANASAKI Shigeki

Abstract

A considerable number of stories about mummies were written in the late Victorian and Edwardian eras and are generally divided into two types: love romances about English male characters falling in love with perfectly preserved and fascinating female mummies, and tales of horror featuring monstrous male mummies attacking or plotting against British people taking vengeance for the colonial sins committed by the British empire. The backdrop for these latter stories is British political and imperial power prevailing over Egypt from 1880s to 1910s. This paper analyzes the stories and male mummy characters in the fiction of W. W. Jacobs, “The Monkey’s Paw” (1902), Arthur Conan Doyle, “Lot No. 249” (1892), Guy Newell Boothby, *Pharos the Egyptian: A Romance* (1899), Richard Marsh, *The Beetle: A Mystery* (1897), and Ambrose Pratt, *The Living Mummy* (1910); and considers several characteristics of male mummies and compares them to differences found in female mummy stories.

Keywords: literature, mummy fiction, revenge stories, *fin-de-siècle*/turn-of-the century

[†] 大阪産業大学 国際学部 国際学科 教授

草 稿 提 出 日 10月12日

最 終 原 稿 提 出 日 11月11日

literature, gothic, horror fiction, “The uncanny”

サイキック・ディテクティブとミイラ

以前にフィクションの世界における、超常現象の解明を専門とするサイキック・ディテクティブに触れ、初期の三巨頭としてE&H・ヘロン (E. and H. Heron) 作のフラクスマン・ロウ (1898), アルジャーノン・ブラックウッド (Algernon Blackwood) のジョン・サイレンス博士 (1908), ウィリアム・ホープ・ホジソン (William Hope Hodgson) のトマス・カーナッキ (1910) を紹介したことがあった (金崎 2017, pp. 7-8)。

このうちの二人、フラクスマン・ロウとサイレンス博士はミイラに関する事件の謎解きをしたことがある。ロウが解決した「バールブラウ荘事件 (“The Story of Baelbrow”)」では、三百年にわたってイングランドのある屋敷にとり憑いているゴーストがいるのだが、無害で家宝とまで見なされているにもかかわらず突如凶暴化して家人を襲う事例を扱っている。その霊の元々の正体はヴァンパイアで、それが屋敷に持ち込まれたミイラに乗とられ実体化したのであった (Heron 2011, pp. 55-68)。サイレンス博士も「炎魔 (“The Nemesis of Fire”)」という事件で、異常な熱気に悩まされているイギリスの屋敷の原因究明に向かうが、敷地内に埋められたミイラが操る火の精霊の仕業だったことがわかる (Blackwood 1997, pp. 84-143)。

三人の心霊探偵のうち奇しくもカーナッキにミイラものが不在なのはどういうわけであろうか。マリレーナ・パラティの指摘がこのことに関係するかもしれない。それによると、同時代のサイキック・ディテクティブのなかでもロウとサイレンス博士は珍しくもイングランド出身であるが、カーナッキは謎めく古文書や儀式に通じているところや、その姓の響きからしても英国以外の出自だとする (Parlati 2011, p. 214, p. 216)。マウリツィオ・アスカリも、カーナッキはロウやサイレンス博士と違って海外旅行や帝国主義的探索に伴う危険への強調はないとする (Ascari 2007, p. 84)。裏返せば、イギリス人のロウやサイレンス博士の物語にはそうした危険が散りばめられていると考えることができそうだ。確かに、「バールブラウ荘事件」にしても「炎魔」にしても、イングランドに持ち込まれたミイラが引き金となって怪奇事件が起きたのだった。

本稿の関心は、十九世紀後半から二十世紀初期に生産されたミイラ・フィクションのなかで、イギリスによる諸外国への帝国主義的政策の裏返しである、海外からの反帝國的な逆襲について瞥見、整理することにある。ただし、当時のミイラ文学はもっと射程が長く輻輳していて、報復や脅威を主筋とせず、あからさまに反帝國的とは判別しがたい作品も

多数存在する。代表的なものは、イギリス人の男性主人公と女性ミイラとのラブ・ロマンスを題材にしたもので、かつて拙稿でその一端の分析を試みた（金崎 2019）。ここではそれとは異なる文脈に置くことで、ミイラ・フィクションの更なる分節化ができればと考えている。

侵略文学という文脈

十九世紀末前後の文学テキストには、異人によるイギリスへの侵入といった設定が数多くあるが、その代表格はなんといってもルーマニアはトランシルヴァニアを居城とする吸血鬼ドラキュラ伯爵のイギリス上陸であろう。そのブラム・ストーカー（Bram Stoker）作『ドラキュラ（*Dracula*）』（1897）の出版百年後に丹治愛は『ドラキュラの世紀末』を上梓し、まさにその副題が示す通り、「ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究」を展開していくが、丹治の分析によると、『ドラキュラ』というテキストにはイギリスにおける諸外国からの侵略恐怖、ユダヤ人恐怖、コレラ恐怖などが織り込まれているという（丹治 1997）。残念ながらミイラ・フィクションへの言及はないものの、これら分析のなかで本稿にとって特に有益なのは侵略恐怖とコレラ恐怖、細菌恐怖である。後の二つの恐怖については後述することとし、まずは侵略恐怖という文脈を見てみたい。

丹治はこの時代に侵略文学という文学ジャンルが確立されたという。発端は遠く『ジョージ6世の治世、1900-1925』（1793）まで遡ることができるものの、『ブラックウッズ・マガジン』誌一八七一年五月号に掲載されたG・T・チェスニー（George Tomkyns Chesney）「ドーキングの戦い——ある志願者の回想（“The Battle of Dorking: Reminiscences of a Volunteer”）」が社会的影響力の大きさからいっても決定的であった。その背景には前年に勃発した普仏戦争（1870-1）があり、圧倒的な勢いでフランス軍を打ち負かした軍国主義国家プロイセンの台頭に対するイギリスの不安があった（同, p. 36）。

その当のフランスも期限満了を待たずに戦争賠償金を完済し、ドイツ占領軍——プロイセンは普仏戦争勝利後にドイツ帝国になる——の期限前撤退を実現するなど、急速に国力を回復していく。対フランスへの恐怖は、一八九四年のロシアとの同盟（露仏同盟）でクライマックスに達するが、その象徴ともいえるものが、フランスと陸続きになることを恐れるあまりに幾度となく頓挫する英仏海峡トンネル計画であった（詳しくは、同, pp. 41-57）。

つまるところ、ドイツやフランスだけでなくアメリカなどが躍進している最中（同, pp. 73-101）、イギリスは周囲の列強に追いつかれるという時代感覚があった。まさに「栄光なる孤立の終焉」である。同時にまた、世界中に有する植民地への統治不安も加わって

いる分、危機感はずばりだったといえる。このような背景に『ドラキュラ』や、火星人の襲来を描くH・G・ウェルズ (Herbert George Wells) による古典SF『宇宙戦争 (*The War of the World*)』(1898) が生みだされていく。この時期のミイラ・フィクションも同じ文脈を共有していると考えられようし、事実そうであった。以下に具体的な作品を見てみたい。

W・W・ジェイコブズ (W. W. Jacobs) 「猿の手 (“The Monkey’s Paw”)」 (1902)

英米の幻想文学のアンソロジーの定番「猿の手」は、ずばりタイトルの猿の手がミイラとして登場する。物語は、その所有者に三つの願いを叶えることができるという、いささかおとぎ話めいた小品である。それもそのはずで、ペロー民話に「愚かな願い」という衝動的な判断を戒めるおおらかな笑い話とあってよい類話があり、そこでは性急で軽はずみな願いのために木樵夫婦は貧しいままで終わってしまう。ペロー版は結局プラスマイナス差し引きゼロの展開である一方、「猿の手」の場合は人ひとりの命が代償となることもあり、話が怪奇めいたものになっていく。

ある夜、イギリスのとある村でささやかに暮らしている老父母とその息子のもとに、軍人のモリスが訪れる。嫌がるモリスから、望みを叶えるという件のミイラを譲り受けた老父は、半信半疑ながらも家の返済残額の二百ポンドを願う。それは息子の事故死による慰謝料となって実現されることになってしまう。悲嘆に暮れる母は、すでに埋葬を済ませた息子の復活を請うことで第二の願いが発動される。ところが、夜更けにドアをノックする音に歓喜して息子を迎えようとする母に対して、死者の復活という禁忌を犯すことを恐れたからか、父はすんでのところ元場所に戻るように最後の願いをする。

実は、この猿の手のミイラは本場エジプトと違ってインド産であるが、エジプトもインドもイギリスの覇権にとっての要所である。以前に触れたことがあるのでここでは詳しく語ることを控えるが、特に一八六九年のスエズ運河の開通以後、イギリスがエジプトに介入しつづける一つの原因が、エジプトを押さえることこそが最短の「インドへの道」の確保につながるからであった。そのためにも南下政策をとるロシアを牽制しようとイギリスは隣国アフガニスタンに干渉するのだが、逆からいえば、スエズ運河の存在によって以前に増してインドは近くなったものの、同時にインドを含むその周辺は不穏な政情がくすぶりつづけていたのである——たとえばシャーロック・ホームズの相棒ワトソンはアフガン戦争で負傷した設定になっていた。猿の手を持ち帰ったモリスも、インドでの「戦争や疾病、見知らぬ人々」(Jacobs 1986, p. 181) について旧友に語るのである。

ところで、幻想文学を読む際のキーワードのひとつに、フロイトが一九一九年に発表し

た「不気味なもの（“Das Unheimliche”）」という概念がある。その原語「ウンハイムリッヒ」の「ハイム」は、英語で「家（“home”）」を表し、否定の接頭辞をとり除いた「ハイムリッヒ」には、「家または家族に属すること、あるいはこれらに属するものとみなされること」（フロイト 2011, pp. 136-7）などの定義がある。同時にまた「ハイムリッヒ」には「隠された、秘められたままである」（同, p. 141）という語義もある。これを踏まえつつ、フロイトが目するものは、「ハイムリッヒという語の意味はさまざまに多様なニュアンスがあるものの、反対語のウンハイムリッヒと同じことを意味する場合」があり、『『親しみのある』（ハイムリッヒ）が『不気味なもの』（ウンハイムリッヒ）になる』（同, p. 145）点にある。つまり、「不気味なものとは、慣れ親しんだもの、馴染みのものであり、それが抑圧された後に回帰してきたもの」（フロイト 2011, p. 187）であり、「抑圧された馴染みのものから生まれる」（同, p. 190）と展開していくところがフロイトの独創的な解釈として貴重である。もっと大胆に、「不気味なもの」とは「知っているはずなのに知らないもの」として登場すると言ってもあながち的外れではないだろう。

「猿の手」に戻ると、父の発願によって凶らずも息子がミイラの犠牲者となり、息子は復活するが「家（ハイム）」への帰還が拒否されるという構成が、フロイトの「不気味なもの」を忠実になぞっている——「猿の手」の方が年代的に早いのだが——ことが理解できるだろう。「親しみのある」存在の息子が生ける死者という「不気味なもの」として回帰するのだ。

ここに反帝国主義的逆襲という観点を加えてみるとどうなるであろうか。父子関係を宗主国イギリスと植民地に置き換えれば、〈父＝イギリス〉は、恐怖の存在となった〈息子＝植民地〉による〈ドメステックな場＝家庭（ハイム）・国内〉への侵入を忌避するという見方が浮かび上がる。このように見ると、「猿の手」には植民地に本国が攻められる恐怖が内包されているものの、丹治が端的に言っているように、「外国恐怖とは、深層に抑圧された自己の否定的イメージが外国という『無気味な』姿をとって回帰してくるものであり、『抑圧されたものの回帰』の一典型」（丹治 1997, p. 219）であるならば、恐怖は外ではなく内にあり、その恐怖の正体はその発端である〈父＝イギリス〉の行為そのものと読める可能性が開かれる。

またインドのミイラである「猿の手」は、ミイラにつきものの蘇生というモチーフがいれば息子に転移したとみることもできそうだが、エジプトに関係するミイラ・フィクションにはやはりミイラ自体が命を吹き返す場合が多い。次に見る「競売ナンバー二四九」はその代表作である。

コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle) 「競売ナンバー二四九 (“Lot No. 249”)」 (1892)

シャーロック・ホームズの生みの親ドイルは、「トトの指輪 (“The Ring of Thoth”)」 (1890) と「競売ナンバー二四九」でミイラを題材にした超自然譚を手がけている。この二篇はそれぞれ対照的で、前者は完全な姿を誇る美しい女性ミイラが登場するロマンスである (金崎 2019, p. 63参照)。後者は、「骨と皮ばかりのやせこけた頭と、夢に出てきて悩まされそうな二つ目」 (Doyle 1970, p. 103) を持つ男性ミイラが怪力で人を襲う。

二篇の違いはジェンダー差ばかりではない。「トトの指輪」の女性ミイラはアトマという固有名が与えられているが、こちらの男性ミイラには名前はなく、カレン・マクファーレンの指摘にもあるように、「少なくとも初期段階では『競売ナンバー二四九』のミイラは『博物館化された』分類コードの圏外では何も意味しない」 (Macfarlane 2010, p. 15)。たんに競売番号が付されるのみでヒトというよりはモノとして、鑑賞される美術品というよりは道具としてオックスフォード大学生エドワード・ベリンガムによって操作される。ここでも「猿の手」と同様、騒ぎの発端はイギリスによって、といえるだろう。

また、家^{ハイム}というトポスからみても興味深い。ベリンガムの住む部屋は大学内にあるのだが、エジプトや東洋の遺物で埋め尽くされ、「書齋というよりは博物館」 (Doyle 1970, pp. 80-1) の様相を呈していた。このような博物館化された家はミイラ文学には珍しくなく、ニコラス・デイリーは他にブラム・ストーカー『七つ星の宝石』を挙げているが、反対にドイルの「トトの指輪」では博物館の小部屋を仮の住処にし、H・R・ハガード『スミスとファラオたち』 (1912) の主人公スミスもカイロ博物館で一夜を過ごす。このように「ミイラ・フィクションでは家と博物館の区別がつかなくなるのが特徴」で「博物館としての家は慣れ親しんだものではなく」、「家庭空間はますます外国的なものとして体験される」と述べている (Daly 1994, pp. 33-4)。「猿の手」では、慎ましくも古き良き英国の家への「ウンハイムリッヒ」の侵入をなんとか食い止めたが、「競売ナンバー二四九」ではすでに部屋が「不気味なもの」と化している。

その部屋で、東洋言語研究の学徒ベリンガムは古文書を解読し、ミイラを使って目障りな同胞の排除を試みるのだが、自ら操る屈強なミイラと対照的に、「肉がたるんだ青白い顔」 (Doyle 1970, p. 79) の肥った人物として描かれている。マーリー・ブフォード・モンタギューはその姿に注目し、いくつかの研究を援用しながら、ベリンガムを当時の英国の「理想とされる男性資本家の『自己統制』という本質的な特徴を欠く男性」 (Montague 2011, p. 141) と見なしている。そうであるなら、文字通り東洋の品々に包囲されているベリンガムはイギリスの弱体化の象徴として表象されているととれるのである。

ブラッドレー・ディーンは、この作品が男性ミイラを敵対者として登場させた最初期のもののひとつと位置づけている（Deane 2008, p. 410 註63）。ただし、ミイラは敵対し脅威ではあるものの、その最後は、理想的イギリス人といってよいアバクロンビー・スミスによって、蘇生の秘術が記されたパピルスもろとも暖炉にくべられ灰燼に帰す。主犯のベリンガムはミイラの反撃に遭うわけでもなく、しかもミイラは人格など感じられない操り人形であり反帝國的な報復の意志は希薄である。「競売ナンバー二四九」はむしろ、理想のイギリス人から逸脱する同胞人——「自己の否定的イメージ」——が審判にかけられているといえるだろう。

では、報復がもっと鮮明に表現されているテキストにどのようなものがあるだろうか。以下にとりあげる二作は圧倒的である。

ガイ・ブースビー（Guy Newell Boothby）『エジプト人ファロス（*Pharos the Egyptian: A Romance*）』（1899）

本作に登場するファロスの暗躍は、同時代のドラキュラと比べても見劣りするところがないといえるだろう。現代に生きるファロスは、実は第十九王朝のファラオに仕えていた魔術団長プタメスであるのだが、イギリス人のエジプト学者に自身のミイラを盗掘されたため、現在にいたるまで不死の呪いが解けず安息が許されずにいた。策を弄してエジプト学者の息子シリル・フォレスターからミイラを取り戻したファロスは、イギリスのみならずヨーロッパ一帯に復讐を誓う。これだけみても「競売ナンバー二四九」における思考力を失った道具としてのミイラと違って強烈な意志の持ち主であることがわかるだろう。

「競売ナンバー二四九」ではイギリス人がミイラを操っていたが、ここではエジプト人がイギリス人を操るという逆転現象が特徴的である。その結果、大陸だけでも死者「159,838名」（Boothby 1899, p. 306）と報告されているのだから、犠牲者もこれまでとは桁違いの規模である。なかでも当時の文脈からみて注目されるのは、その報復手段であろう。ファロスはシリル・フォレスターにウイルスを接種し、彼を媒介に訪問地に病原菌を拡散させていく。いわばパンデミックと無差別テロを同時に起こすのである。

先述したように、丹治は『ドラキュラ』のなかに、イギリスにおける他国からの侵略恐怖を浮き彫りにしたが、それと同程度にコレラに対する恐怖にも紙幅を割いている。特に『ドラキュラ』の出版年に最も近い一八九二年のハンブルクのコレラ流行にイギリスは恐々としていた。そこでの猛威が伝えられると、「イギリス人にとってハンブルクは（多数の東欧ユダヤ人移民がそこからイギリスにむけて出港してくる都市であるとともに）、イギリスにおけるコレラ流行が直接そこからもたらされた都市として記憶され」るように

なった(丹治 1997, p. 173)。『ドラキュラ』の二年後に世に出た『ファロス』もハンブルクの大流行が残響していると考えて間違いないであろう。なにしろ、ファロスと保菌者のフォレスターは、イギリス政府が港を閉ざしているにもかかわらず秘かに調達した船で、まさにそのハンブルクからイギリスへの上陸を果たすのである。

コレラ菌だけでなく、この時代は病原性微生物の発見ラッシュであった。ここでも丹治は主だったもの——マラリア原虫・腸チフス菌(1880)、結核菌(1882)、コレラ菌・ジフテリア菌(1883)、ペスト菌(1894)、赤痢菌・マラリア菌(1897)——を列挙し(同, p. 173)、細菌恐怖と『ドラキュラ』やその他の文学テキスト——ラドヤード・キプリング「細菌破壊者」、ウェルズ「盗まれたバチルス菌」など——を関連づけている(ウェルズと細菌といえば、人類が作り出した利器ではなく細菌によって火星人が全滅する『宇宙戦争』が即座に想起される)。またモンタギューも『ファロス』を含めた一連の文学テキストと感染や細胞の関係について分析している(Montague 2011, pp. 44-50)。

『ファロス』には、催眠能力や千里眼、未来視など、オカルト能力がふんだんに盛り込まれている一方で、その報復の最大手段がオカルト的なものでなく、こうしたバクテリアをめぐる当時の科学や文化言説を取り込んだものなのだ。しかも国際的な要人、例えばオーストリア皇帝兼ハンガリー王フランツ・ヨーゼフ一世(Boothby 1899, p. 218)や英国内務大臣(同, pp. 318-22)などを登場させることで、「猿の手」や「競売ナンバー二四九」よりもスケールが大きく、陰謀小説の系譜に連なる作品にもなっていて、当時の列強と植民地の政治的情勢が色濃く表面化している。この政治色の顕在化についていくつかの指摘を紹介したいが、それには以下のテキストを少し見てからの方がよい。

リチャード・マーシュ(Richard Marsh)『黄金虫(The Beetle: A Mystery)』(1897)

マーシュの『黄金虫』はミイラそのものが出てくるわけではないが、タイトルはエジプトの聖なる甲虫スカラベのことであり、エジプトによるイギリスへの報復という侵略文学の一つとしても『ファロス』と遜色なくここで取り上げる価値がある。今では遠く及ばないものの、デイヴィッド・スチュワート・デイビスもワーズワース版の序文で述べているように、『ドラキュラ』と同年に発表されるや、一年間の売り上げは『ドラキュラ』よりも優り一九一三年までに十五版を重ねる人気作であった(Davis 2007, p. vii)。

マーシュの異人は吸血鬼との類似点も多く、マリア・フライシュハックは動物への変身、動物のコントロール、不死性などを挙げ(Fleischhack 2009, p. 47, p. 52)、またデイビスも、複数の視点による語りや催眠能力、旧来のイメージを脱した開明的な「新しい女」の登場など、『ドラキュラ』との共通点から『黄金虫』を分析している(Davis 2007,

pp. vii-xi)。確かに『黄金虫』は『ドラキュラ』と同時代の産物にほかならない。

『黄金虫』における報復とはおおよそ次の通りである。イギリス人のポール・レシinghamは、若かりし頃エジプトで現地の歌姫の企みによって二ヶ月以上幽閉されたことがあった。そこでレシinghamはエジプトの女神イシスの信奉者たちによる秘儀——裸の女性が陵辱され生きたまま焼かれる——に立ち会うことになる（Marsh 2007, pp. 199-200）。儀式での供物となる者は「キリスト教徒の女性、もっというなら若いイギリス女性が好まれた」（同, p. 252）というのだから大英帝国への報復のすさまじさが読み取れる。辛くも主導者の歌姫から逃れたレシinghamは、二十年後に革新派の政治家として頭角を表し、マジョーリー・リンドンとの結婚を控えていたが、それを恨む報復者が二人の破滅を謀りロンドンに潜入していた。

この報復者が歌姫なのだ。つまり、自分の元を去ったレシinghamとその相手へ怨恨を抱く点で、ファロスと違って『黄金虫』の報復者は、世紀末で流行した男性を誘惑し破滅に導く「宿命の女」^{ファム・ファタール}の要素を併せ持つ。それゆえ、同時代人のH・R・ハガード（Henry Rider Haggard）の作品、例えば、いずれもアフリカの部族の女王である『洞窟の女王（She）』（1887）の不死のアッシャや、『黄色の神（The Yellow God）』（1908）の次々と夫を死に至らすアシカ、ミイラ・フィクションならブラム・ストーカー『七つ星の宝石（The Jewel of Seven Stars）』（1903）の女王テラといった魔性の女にも接近しているといえるだろう（金崎 2019, pp. 67-8）。だがそれだけにとどまらないところが重要である。それは『黄金虫』における報復者の異様な姿である。

初めて登場する場面で、目撃者は以下のようにその異貌を語る。

初めは男か女か決めかねました。実のところ最初は人間じゃあないと思ったんです。ですがそれから、こんな生き物が女なんてありえないという他ならぬこの理由でもって、男だと知ったわけなんです。（中略）想像を絶する歳の取りようでいくつなのかわかりませんでした。（中略）けれど、驚くべき眼力があり、ひょっとしたら自分と同年齢ということもありえました。なにか恐ろしい病気に冒されているからか、自然ではありえないほど醜怪だったのはそのせいかもしれません。

さらに「髪の毛一本も生えず」「サフラン色の皮膚」は「皺だらけ」で「顎がない」という描写が続き（Marsh 2007, p. 16）、どこかミイラを彷彿とさせるところもある。その一方で、なかった顎も翌日には戻り、顔には「まさに女性に不可欠なもの」（同, p. 24）が備わっていた。さらには黄金虫にも変身できるのだ。このように報復者の姿は年齢やジェン

ダー、種別をも越境し、または攪乱させるかのように変貌する。

ではなぜ報復者の性別不詳な姿が強調されるのだろうか。ここでは『ファロス』のところで触れた「政治色の顕在化」という側面から考えてみたい。

「エジプトのイスラム化」

「エジプトのイスラム化」という言葉はアイリス・ブルフィン（Bulfin 2011, p. 426）の論考に出てくるもので、ブルフィンの考察は示唆に富むところが多い。

ファロスは「背が平均よりかなり低く」、『黄金虫』の報復者と同じく「無数の皺」があり「何歳なのか判断に大いに苦しむ」醜い老人として描かれるが（Boothby 1899, pp. 18-9）、ブルフィンが注目するのはそこではない。その分析の焦点は古代エジプトのものとは似ても似つかないファロスの衣装に当てられる。特にファロスが被るつばのない黒いビロードのスカルクヤップ（同, p. 31）が、イスラム教における礼拝用の帽子「タキヤー（“taqiyah”）」に、さらには当時の挿絵はテキストに言及のない「房」を帽子につけ加えることで、エジプトでは「タルブーシュ（“tarboosh”）」と呼ばれるトルコ帽「フェズ（“fez”）」であることが強調されている。エジプトではターバンが普通の被り物だが、支配層のトルコ系エジプト人はこの帽子を着用していたことから、挿絵の脚色のおかげで「読者に対してファロスと現代エジプトとの結びつきをいっそう強めることになったのは間違いない」とブルフィン（Bulfin 2011, pp. 426-7）はいう。

一方、『黄金虫』の報復者はどうであろうか。そもそも報復者は最後まで名前が明かされないが、潜伏していたロンドンの家では「モハメド・エル・ヘイル」（Marsh 2007, p. 227）という男性名で契約を結び、その姿はアラブ人と貸主に認識されている（同, pp. 228-9）。主要登場人物の一人である発明家のシドニー・アサートンは、その容貌を「どこかイスラム教徒的でないところがある」（同, p. 99）としながらも、衣装はアルジェリア人やスーダンのアラブ人が纏うものを思い起こしている（同, p. 64）。また事件を回想する探偵チャンネルも「正体をわかりやすくするためこれから例の男をアラブ人と呼ぶことにする」（同, pp. 240-1）と語る。変幻自在の報復者であるが、語りが進むにつれアラブ人男性へと固定化されていくのである。

これに関連づけてブルフィンは、「マーシュの試みは、黄金虫の出自が謎めいた古代にあると創造したことにあるが、それにもかかわらず絶えず現代イスラムを連想させる方向へ逆戻りしていく」と述べ、イシス信仰の儀式的被害者にイギリス人女性が好んで選ばれるのも、「イングランドによるエジプトへの侵入に対する報復の比喩」ととらえる（Bulfin 2011, p. 430）。たしかに、対エジプトとは明示されないものの、来るべき英国の危機に備

えてか、アサートンは大量殺戮兵器の発明に勤しみ（Marsh 2007, p. 63）、復讐の相手がいずれ国家の中核的存在と目されている国会議員のレシinghamであるあたり、政治色の顕在化は否めない。以上のような観点を踏まえると、現代エジプト人やアラブ人の姿が印象づけられた場合、『ファロス』も『黄金虫』も当時の国際的な緊張感を帯びていくのである。そして『黄金虫』における報復者のジェンダーの揺れは「宿命の女」と「エジプトのイスラム化」——さらにはダーウィニズムによる退化恐怖も——という複数のベクトルの力場によって産みだされたものと考えられることもできるだろう。

アンブローズ・プラット（Ambrose Pratt）『生きているミイラ（*The Living Mummy*）』（1910）

ブルフィンは分析の俎上に載せていないが、アンブローズ・プラットの『生きているミイラ』も、現代アラブ人とミイラの関係を見る上で一瞥しておいていただろう。認知度が決して高いとはいえないこの長編は、初めから終わりまでスコットランド人ヒューゴー・ピンセントの視点による一人称語りで、語り口といいタフガイぶりといい、どこかハードボイルド・スタイルの先駆けのようなところもある。問題のミイラは、おそらく偶然ではないであろうが、ブースビーのファロスの正体と同一人物の神官プタメスだと設定されている。ただしファロス＝プタメスのように陰謀を主体的に画策し容赦無く報復していくわけではなく、イギリス人ウィリアム・ベルヴィルに使役される点は、どちらかというトイルの男性ミイラに似ている。

このミイラを主人公ピンセントは終始アラブ人と呼ぶのだ。プタメスの石棺を密かに調査した際、中には「あのアラブ人がじっと自分を見つめていた」と驚きながらも、「俺は外科医だから間違えっこない、こいつは絶対ミイラじゃないし、死んでずいぶん経っているわけじゃない」（Pratt 2018, p. 67）と冷静に観察していく。もっとも、この確信は絶えず揺らぎ、ミイラの蘇生という超常現象について最後まで主人公は半信半疑なまま物語が閉じられるが、それでもアラブ人という呼称は一貫している点で、タイトル『生きているミイラ』を裏切る結果となっている。

その「死者の棺の中で生きているアラブ人」（同, p. 68）は、ベルヴィルの掌中に落ち主人を支える影の存在となるのだが、悪行に関してはイギリス人ベルヴィルによるものが多い。例え、透明人間になるスーツを利用して——H・G・ウェルズの『透明人間』は一八九七年作である——少なくとも四名の殺害に関与し、ヒロインの莫大な遺産を狙う。また囚われの身となったピンセントも古代エジプトの処方薬を駆使するベルヴィルによって危うくミイラにさせられる（最後は辛くも危地を脱し、ベル

ヴィルもアラブ人＝ミイラも焼死する)。

このように、ここでのアラブ人＝ミイラは『ファロス』や『黄金虫』に比べて報復の強度は劣るかもしれないが、それでも上記の事件は物語の舞台が現代ロンドンに移ってから起こるのである。舞台は前半が石棺をめぐる展開されるエジプトというのはわかるにしても、作者のプラットは『ファロス』の作者ガイ・ブースビーと同じくオーストラリア出身にもかかわらず、後半が大都市ロンドンであることと、そしてミイラが主人公には現代アラブ人として認識されているということ、さらには『ファロス』と『生きているミイラ』の両テキストとも、生き残った主人公とヒロインは危険極まりない都会を避けロンドンから離れていく結末となっていることは記憶に留めておいていいだろう。ここでも大英帝国の首都が不穏な事件の中心地になっているということは、自らの内部に住まう「不気味なもの」の回帰の一変奏としてみることができるだろう。

最後に 新旧エジプトのはざままで

ミイラではなく現代アラブ人やエジプト人と冠されると政治的な様相を帯びてくるというのは、古代エジプトと現代エジプトという新旧の扱いにも表れている。ブルフィンは、古代文明は高く評価されている一方、現代エジプト人はファラオの墮落した子孫として蔑視されていると指摘している (Bulfin 2011, p. 426)。前者においてその最たるものは、美しい姿のまま登場する女性ミイラに結実される。そうしたミイラとのロマンスは設定が現代のイギリスであってもいわば夢物語のような展開が多い。一方、後者は男性ミイラが表象され、とりわけ現代イギリスが舞台になるとアラブやエジプト人の装いをまとうのである。

ミイラにおける性差の違いに言及しているエレナ・ドブソンの論を参照しながらまとめると、男性ミイラは不穏で行動的な遺物であるとともに、一般的に肉体的退化とその腐食を表し、女性ミイラは古典彫刻のように動かず性的関係を誘発し、おとぎ話の王女と結びつく傾向にある (Dobson 2017, p. 24)。これに、男性には現代エジプト、女性ミイラには古代エジプト的な属性を持つことが多いと付言してもいいだろう。女性ミイラがイギリスとエジプトとの政治的な緊張関係をほかすのと対照的に (金崎 2019, p. 69)、男性ミイラの登場はもっと鮮明に帝國的な不安を浮き彫りにする。

第一次大戦あたりまでこれら二つのタイプのミイラ・フィクションが存在していたが、次第に男性ミイラが全盛となっていく。敗戦国オスマントルコは開戦時にエジプトへの宗主権を手放し、戦後エジプトは独立する。それからのイギリスについてノルウェン・コリウは、第一次大戦後の帝國的な不安はヨーロッパ問題へ場所を譲り、オリエントの誘惑的で

性的に脅威を与える女性ミイラは影をひそめ、映画産業も怪物的で血に飢えた男性ミイラのほうに没頭したとしている（Corriou 2015, p. 12）。一九二二年のハワード・カーターによるツタンカーメン王墓の発掘とその後の「ファラオの呪い」の顛末も男性ミイラへの傾斜へ拍車をかけたことだろう。ここに至って我々にとって馴染み深い「復讐するミイラ」が定式化したといえる。

繰り返し述べているところだが、第一次大戦以前に量産されたミイラ文学は、大戦以後と比べて広範囲にわたるテーマを扱っている点でも最盛期だったといえる。本稿はそのなかでとりわけ男性ミイラを扱う作品を概観した。それは同時代の他の侵略文学の枠組——帝国主義的政策の裏返しである、海外からの反帝國的な逆襲への不安——から大きく逸脱しないとはいえ、男性ミイラ特有の諸相の一端は確認できたのではないだろうか。

引用文献

- Ascari, Maurizio (2007). *A Counter-History of Crime Fiction: Supernatural, Gothic, Sensational*. Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan.
- Blackwood, Algernon (1997). "The Nemesis of Fire." *The Complete John Silence Stories*. Ed. and Intro. S. T. Joshi. New York: Dover, pp. 84-143.
- Boothby, Guy (1899). *Pharos the Egyptian; A Romance*. New York: D. Appleton and Company.
- Bulfin, Ailise (2011). "The Fiction of Gothic Egypt and British Imperial Paranoia: The Curse of the Suez Canal." *English Literature in Transition, 1880-1920* vol. 54, no. 4, pp. 411-443.
- Corriou, Nolween (2015). "'A Woman is a Woman, if She had been Dead Five Thousand Centuries!': Mummy Fiction, Imperialism and the Politics of Gender." *Miranda* vol. 11 (July 2015), pp. 1-15.
- Daly, Nicholas (1994). "That Obscure Object of Desire: Victorian Commodity Culture and Fictions of the Mummy." *Novel* 28 (1994), pp. 24-51.
- Davis, David Stuart (2007). "Introduction." *The Beetle: A Mystery*. Intro. David Stuart Davis. Hertfordshire: Wordsworth Edition, pp. vii-xii.
- Deane, Bradley (2008). "Mummy Fiction and the Occupation of Egypt: Imperial Striptease." *English Literature in Transition, 1880-1920* vol. 51, no. 4, pp. 381-410.
- Dobson, Eleanor (2017). "Sleeping Beauties: Mummies and the Fairy-Tale Genre at the *Fin de Siecle*." *Journal of International Women's Studies* vol. 18 no. 3 (February

- 2017), pp. 19-34.
- Doyle, Arthur Conan (1970). "Lot No. 249." *The Best Supernatural Tales of Arthur Conan Doyle*. Ed. and Intro. E. F. Bleiler. New York: Dover Publications, INC., pp. 74-112.
- Fleischhack, Maria (2009). "Vampires and Mummies in Victorian Gothic Fiction." *Inklings-Jahrbuch* vol. 27, pp. 44-59.
- Haggard, H. Rider (1921). *Smith and the Pharos and Other Tales*. New York: Longmans, Green & Co.
- (1998). *She*. Ed. and Intro. Daniel Karlin. Oxford and New York: Oxford UP.
- (2017). *The Yellow God*. Canton, Ohio: Pinnacle Press.
- Heron, E. and H. (aka Pritchard, Kate and Hesketh) (2011). "The Story of Baelbrow." *Supernatural Detectives 3: Flaxman Low/Lord Syfret*. Landisville, Pennsylvania: Coachwhip Publication, pp. 55-68.
- Jacobs, W. W. (1986). "The Monkey's Paw." *The Oxford Book of Ghost Stories*. Ed. Michael Cox and R. A. Gilbert. Oxford and New York: Oxford UP, pp. 180-9.
- Macfarlane, Karen E. (2010). "Mummy Knows Best: Knowledge and the Unknowable in Turn of the Century Mummy Fiction." *Horror Studies* vol. 1 no. 1 (1 January 2010), pp. 5-24.
- Marsh, Richard (2007). *The Beetle: A Mystery*. Intro. David Stuart Davis. Hertfordshire: Wordsworth Edition.
- Montague, Murry Buford (2011). *Science, the Occult, and the Conservative Project of Late Victorian and Edwardian British Mummy Fiction*. Diss. Ball State U. (Submitted in fulfillment of the requirements of the degree of Doctor of Philosophy. July 2011).
- Parlati, Marilena (2011). "Ghostly Traces, Occult Clues: Tales of detection of Victorian and Edwardian Fiction." *European Journal of English Studies* vol. 15 no. 3 (December 2011), pp. 211-220.
- Pratt, Ambrose (2018). *The Living Mummy*. Vancleave, Mississippi: Ramble House.
- Stoker, Bram (2004). "The Jewel of Seven Stars." *Return from the Dead: a Collection of Classic Mummy Stories*. Selected and Intro. David Stuart Davis. Hertfordshire: Wordsworth Edition.
- 金崎茂樹 (2017) 「サイキック・ディテクティブの登場——英米小説のあるジャンルについて

て——」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』29, pp. 1-13.

—— (2019) 「十九世紀末から二十世紀初頭におけるラブ・ロマンスとしてのミイラ・フィクション」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』37, pp. 55-71.

丹治愛 (1997) 『ドラキュラの世紀末 ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』東京大学出版会

フロイト, ジークムント (2011) (中山元訳) 「不気味なもの」『ドストエフスキーと父親殺し／不気味なもの』光文社 pp. 127-216.